

「菜の花エコプロジェクト」をさらに広げ、未来を担う若い世代に橋渡ししたい。

あいとうエコプラザ菜の花館 館長
1978年 経済学部卒業

の む ら ま さ つ ぐ
野村 正次さん

あいとうエコプラザ菜の花館 館長
野村 正次 さん

プロフィール

1956(昭和31)年、滋賀県生まれ。
1978(昭和53)年、京都産業大学経済学部を卒業、
ふるさとの愛東町役場に就職。
2005年、東近江市との合併と同時に同市生活環境課に所属し「あいとうエコプラザ菜の花館」の館長に就任。

キラリと光るまちづくりがBDFプロジェクトを後押し

愛東町(現・東近江市)が全国に先駆けて廃食油を燃料化するプラントを導入し、BDF使用の公用車を走らせたのは10年前のことだ。

「当時、町の人口は57000人。田園を宅地化し京都のベッドタウンになる道を選ばず、農業を基盤とした小さくてもキラリと光るまちづくりを進めよう、という気運が役場にも住民の皆さんの間にも浸透していました。しっかりと自治組織の下に、資源ゴミの回収システムも確立されていましたから、BDF

滋賀県東近江市愛東地区。琵琶湖の湖東に位置するのどかな田園地帯で始まった「プロジェクト」が、今、全国の自治体や地域に広がっている。「菜の花エコプロジェクト」。菜の花を栽培して菜種油を取り、廃食油をバイオディーゼル燃料(BDF)として活用する資源リサイクル活動だ。同プロジェクトの拠点となる「あいとうエコプラザ菜の花館」の立ち上げに携わり、現在も館長として活動の推進、PRと後進の指導に当たる野村正次さんにお話を伺った。

Portrait 05

京産大マインドを持ち、活躍している方々にインタビュー。
その言葉から、あなたのめざす世界が見えてくるかもしれません。

「僕が卒業した当時は就職難でしてね。採用してくれたから、ありがたく就職させていただいた、というのが正直なところだ」と苦笑する野村さん。特に行政について深く学んだというわけではない。それでも学生時代は自分の人生にとって最も貴重な期間だったと野村さんは述懐する。

「いろいろなタイプの人間と知り合えた。わからないなりに、社会について、人生について色々語り合った。もちろん遊びもしました。そんな一見無駄とも思えるモラトリアムの時期が、実は人の一生の中ではとても大切なのではないかな」

そんな野村さんに意欲と使命感を与えてくれたのは、当時の町役場の活気に満ちた空気だった。

「町長をはじめ全職員が、まちづくりに燃えていた。『職員が変わればまちが

公用車を走らせた2年後には、菜の花の栽培→食用油生産・販売→廃食油回収→BDF精製→利用という地域内資源循環システムが生まれ、有効に機能するようになりました」

プロジェクトを通してふるさとのすばらしさを再認識

「菜の花館、およびエコプロジェクトの運営は、行政が前面に出るのではなく、NPOとの共同運営を基本としています。市民の協力がなければ、こうした運動の輪は広がりません」と野村さんは言う。「私の役目は、愛東で生まれた菜の花エコプロジェクトを、合併して拡大した東近江市全域に広げること。そして若い世代にその成果を継承することです。学生ボランティアも大歓迎。ぜひ京都産業大学の後輩の皆さんも、菜の花の種まき、精油、PRなどのボランティアに参加してください」

小さな愛東の町で生まれた菜の花エコプロジェクトは、今、全国44都道府県に広がっている。その「聖地」にある拠点施設・菜の花館には開館初年度、全国から180以上の団体が訪れた。

若い世代にプロジェクトの未来を託したい

「菜の花館、およびエコプロジェクトの運営は、行政が前面に出るのではなく、NPOとの共同運営を基本としています。市民の協力がなければ、こうした運動の輪は広がりません」と野村さんは言う。「私の役目は、愛東で生まれた菜の花エコプロジェクトを、合併して拡大した東近江市全域に広げること。そして若い世代にその成果を継承することです。学生ボランティアも大歓迎。ぜひ京都産業大学の後輩の皆さんも、菜の花の種まき、精油、PRなどのボランティアに参加してください」



「菜の花館」の人気アイテムの一つがBDF使用のゴーカート。見学に訪れた小中学生たちは、自分の手で廃食油から精製したBDFを使ってゴーカートを走らせることができる。「一人でも多くの子もたちに、“エコ”を楽しく体感してもらえたらうれしいですね」と野村さんは目を細めて語ってくれた。



◀ 京産大プチメッセージ

実家の駅からズーッと同じ車両で一緒に、なんと大学まで同じだった人がいました。(文化学部 2年次生 勝井 大輝さん)